慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	黒川俊雄編著 地域産業構造の変貌と労働市場の再編 : 新産業都市いわきの研究
Sub Title	Transformation of regional industrial structure and reorganization of labour market : a study on new industrial city Iwaki
Author	加藤, 佑治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1988
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.81, No.2 (1988. 7) ,p.357(213)- 360(216)
JaLC DOI	10.14991/001.19880701-0213
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19880701-0213

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」81巻2号（1988年7月）

書評

黒川俊雄 編著

『地域産業構造の変貌と労働市場の再編
——新産業都市いわきの研究』

（法律文化社，1988年）

日本経済の“国際化”と，これにともなう「経済構造の転換」が叫ばれている。そして事実それ等は現に急速に進行しつつある。こうした日本経済の変化が，わが国労働者をはじめとする勤労者の状態にいかなる影響を及ぼすか，こうした問題が重要な国民的関心事であることは疑いあるまい。いわんや社会政策，労働問題研究にたずさわる者にとって，こうした問題は不可避のテーマであることもまた疑いないところであろう。

ところで本書は，1981年から85年の5年間にわたって福島県いわき市に視点をあてて，大きくかつ急激な産業構造の変化と労働市場の再編過程を究明した注目すべき集団労作である。したがって，もちろんのことながら本書は上述したような問題を直接のテーマにしたものではない。だが本書の執筆者達が，上述のような問題意識のもとにこの共通テーマに取り組んだことは，この著の「課題」を述べた本書冒頭の文章からしても明らかである。そしてこうした尖鋭な問題意識はその執筆者によって若干の相違はあるとは言え，ほぼその全編を貫いていると言えよう。

本書について論評する前に先ず本書の構成と執筆分担者を記し，次いで本書各章の梗概を述べることにしよう。

第1章　課題と分析視角……三井逸友
第1節　本書の課題
第2節　「地域労働市場」の分析視角
第3節　調査の方法と本書の構成
第2章　いわき市経済・産業構造の変動……廣江　彰
第1節　経済・産業構造の変動と「地域経済」
第2節　福島県経済の「発展」構造と低賃金基盤の拡大
第3節　いわき市の産業構造
第4節　いわき市工業の展開過程
第5節　いわき市の産業構造変化と地域開発政策の展開
第3章　労働市場の構造と変動(1)総論……阿部　誠
第1節　人口の変動
第2節　労働市場の基本的構造
第3節　地域開発と労働市場の構造変化
第4章　労働市場の構造変動(2)産業別分析
第1節　電機産業の企業階層構造と労働市場……京谷栄二
第2節　化学産業における「合理化」地域労働市場……清山　玲
第3節　建設業の構造再編……岡沢　勉
第4節　底辺階層の形成と地域労働市場……阿部　誠
第5章　労働市場の構造と変動(3)労働力の動態的分析
第1節　石炭産業のスクラップ化と炭鉱離職者の分解過程……長井偉訓
第2節　労働市場の重層構造と雇用者の職業経歴……武田圭太
第3節　地域移動と家族の形成・分解……下田健人
第6章　労働力の再生産構造……伊藤セツ
第1節　労働者世帯の構成・有業率・収入構造
第2節　収入と支出の構造
第3節　婦人労働者の労働時間と生活時間
第4節　住宅事情
第5節　共働き家庭の子どもの世話・保育
むすび
第7章　地域労働市場の再編と政府・地方自治体の地域開発政策……黒川俊雄
はじめに
第1節　資源開発型地域開発の流産
第2節　「所得の地域格差是正」を名目とする

「工業の地方分散」
むすび
補論　「地域労働市場」把握と階層性……三井逸友
第1節　「労働市場」研究の「転換」
第2節　「賃労働」論としての「労働市場」研究
第3節　労働市場論における「階層性」の問題
第4節　労働市場論における「地域」の問題
第5節　「労働市場」における「地域性」
第6節　「地域労働市場」の「階層性」把握の構図
あとがき……黒川俊雄

まず本書第1章「課題と分析視角」では，第1節「本書の課題」において，すでに評者がふれたような日本経済の今日的変化に照応する労働市場の構造的変動の把握という現代的問題意識がこの実態調査研究の基底にあることを述べた上，その「課題」を次のように提示される。「本書では，この実態調査にもとづいて，高度成長以来の日本資本主義の再生産構造に規定された地域経済の変容過程で，重層的構造をもつ地域労働市場が，いかに変動し，どのように再編されていったか，そして，そのことが，地域の労働者の就業や生活にいかなる影響をおよぼしたのかという点を実証的に明らかにすることを課題としている」と。第2節では次の二つの視角が提示される。すなわち第一に「市場」をめぐる「均衡」論的視角や流通論的労働力「価値規定」論に留まることなく労働過程＝価値増殖過程を基礎とする生産関係，搾取形態の問題としての視点に立つこと，第二に労働者群の階層的・重層的編成と分断を含む相互の関係を全国的構図とともに地域においても注目する，第三に熟練労働者の過剰化と中高年女子労働力の基幹的部門への動員，労働力政策の変化にともなう不安定雇用層の広がり，低賃金層の再編等を把握できる「動態的視点」を必要とする，第四に家族という労働力の現実の再生産の単位における就業と生活状態を具体的につかむ，第五に個々の労働者ないし家族のみならず，独占，地域企業の生産構造，その創出・形成・再編の過程をつかみ国家・自治体の政策の機能とその労働市場構造との関わり方を明らかにする，第六に市場の背後にあってこれを規定するのは資本・賃労働の対抗関係である以上，自治体などの政策実施の性格については「復眼的な見きわめ」が必要である，第七に「現状分析」への課題としても「政策」と「運動」を取り上げてゆくこと，が必要であるとされる。第3節では調査の対象としていわき市を選んだ理由を述べたあとその調査方法と調査の進められた経緯が具体的に述べられる。

第2章は，いわき市労働市場研究の前提ともいうべき経済・産業構造の変化を歴史的に明らかにする。第3章は前章を受けてさらに，いわき市の労働市場が地域開発にともなって，構造的にどのように変化し，どのような問題をはらみつつあるかを明らかにする。第4，5，6章は本書の中核的部分をなすが，まず第4章は，今日いわき市の産業の支柱をなしている電機産業，かつて石炭産業スクラップ化以後のいわき市の「リーディング産業」と期待された化学産業，さらに今日電機と並んで地域経済を支えている建設業，さらにこの地域に滞留する底辺階層を失対事業就労者と生活保護層を中心に，その実態を豊富な資料をもとに具体的に明らかにしている。第5章では産炭地以来の産業・労働市場の変動にともなう個々人の職業経歴を家族員をもふくめて分析している。この場合第4章が静態分析であったのに対し動態分析をおこなっている。第6章では労働者家族を単位とした就業および消費生活などを労働者の生活構造と生活実態をふくめて解明される。第7章では，いわき市地域の産業構造，さらには労働市場の再編をひき起した重要な要因である政府・自治体の歩みが批判的に解明される。最後の補論は，労働問題研究における労働市場研究，さらには地域労働市場研究の位置を明らかにした独立論

文となっているが，この調査研究のための理論的基礎を提示するものとなっている。

ところで，われわれはここ数年の間に地域労働市場に関する調査研究として，いくつかの優れた集団労作をもつに至っている。いまこれを思いつくままに列挙すれば，布施鉄治編著『地域社会変動と階級・階層――炭都・夕張／労働者の生産・労働――生活史・誌』1982年，御茶の水書房刊；中央大学経済研究所『兼業農家の労働と生活・社会保障――伊那地域の農業と電子機器工業実態分析――』1982年，中央大学出版部刊；小山陽一編著『巨大企業体制と労働者』1985年，御茶の水書房刊；島崎稔・安原茂編『重化学工業都市の構造分析』1987年，東京大学出版会刊などである。やや象徴的な言い方が許されるならば第一の調査が石炭，第二のそれが電機，第三のそれが鉄，第四のそれが自動車と深くかかわった地域問題に取り組んだ労作と言えるだろう。本書はこれ等につづいてあらわれた調査であり，上述のような言い方をすればかつては石炭につづいては化学に，そして今や電機に深くかかわっている地域の問題と取り組んだ労作と言うことができよう。

以上の諸労作のうち特に共通性が多いと思われるのは，第一にあげた布施教授等の研究であろう。すなわちともに夕張，いわきという炭鉱地帯を選び，かつともに現実に生起しつつある経済変動にいかに対応するかという鋭い問題意識から出発していることである。もちろん，その刊行時点の相違から，布施氏等の場合は“オイルショック”本書の場合は“円高”という日本経済の当面した問題の相違はあるが……。しかも両者に――この場合は上述した他の三調査も同様であるが――共通しているもう一つの事実はともに独自の調査にもとづくきわめて豊富な資料によって分析がおこなわれているということであろう。だが本調査の対象地域であるいわき市の場合には夕張の場合とも異なるのは，夕張の場合，石炭産業の斜陽化にかわる新産業の企業誘致策がとられたにもかかわらず，これと言った代表的な産業ないし企業が立ちあらわれなかったのに反し，いわき市の場合にはともあれ石炭産業のスクラップ化以後，化学，さらに電機といった「リーディング産業」が立ちあらわれているということである。しかもややシェーマ化して言えば石炭――化学――電機と過去30年間にリーディング産業を二度も変えているということである。このことは本調査の問題意識から言っても，このいわき市がきわめて適した対象地域であったということができよう。したがって評者はこの地域をあえて選定された調査者達の眼の確かさを高く評価したい。この意味でこれ等電機，化学とこれに関連する建設業などの産業を静態的に分析した第4章，炭鉱スクラップ以後の変化を動態的に分析した第5章は本書中の中核的役割を担った部分であるということができよう。すなわち，第4章はこの地域において依然としてリーディング産業たる地位を保っている新興の電機，リーディング産業たることを期待されながら二度の石油危機を経験し，なおからくも電機とともに地域の基軸産業の一方を担い得ている化学といった二つの産業の大手企業の労働力階層構造や賃金労働条件等，企業の内部資料をも豊富に用いて分析している。さらにこの章では，この地域の産業再編とのかかわりで伸長した建設業さらに失対・生活保護層の状態の具体的分析をおこなっている。第5章は前章の産業別の静態分析に対応して，炭鉱スクラップ以後の労働市場の動態分析をこころみている。またこの地域の労働市場の問題を労働力の再生産の側面から巨大都市・東京の場合と比較した第6章もまた本書の中核部分をなしていると言えよう。

本書を読んで評者は第4章で明らかにされた電機および化学の大手企業における格差構造やまた建設業，失対事業さらには生活保護受給者として滞留する底辺層の存在などが，第5章の動態分析によって解明された石炭産業スクラップ化とこれにともなう少なからぬ炭鉱離職者の分解にはじまるこの地域特有の労働市場に規定

され，またさらに独占資本の利益をバックアップする政府および自治体の政策によって大きく規定されていることを知ることができた。

こうした点から見て本書第1章において開示された，労働者の階層・重層的編成を「全国的構図とともに地域においても注目する」という視角が，この調査においてほぼ生かされたと言うことができよう。本書はこうした意味で，今日，円高＝「空洞化」の進行する今日の「産業構造の変革」とこれのひき起す労働市場の変化とこれにともなう労働者をはじめとする勤労者の状態を正しくつかむ上での格好の材料を提供してくれていると言うことができよう。

だが評者はこうした本書にも全く不満を抱かなかったわけではない。以下これについて述べることにする。

第1に感じた不満は評者が上述したような本書の積極面にかかわるものである。すなわちすでに述べたように本書は，いわき地域がそこに刻印された歴史的条件を写し出して低賃金労働市場としての特徴をもつ地域労働市場を形づくって来たことを明らかにしているが欲を言うならば，炭鉱スクラップ以後のこの地域の労働市場の展開，化学からさらに電機に至る展開を第2章，第3章での産業構造の変化と労働市場の変化の総論的叙述に対応して，さらに詳細にあとづけて頂くと一層この調査の趣旨が生かされたのではなかろうか。だがこの調査の眼目に当る部分であるだけに，評者はやや過剰な期待を抱き過ぎているのである。また執筆者のすぐれた力量が充分に全体的に生かされていないかも知れないようなところが若干見受けられたが，もう一つ，全体を統一するための討議が必要だったかに思われる。

第2に本書では国または自治体の地域政策についての批判はおこなわれているが，こういう批判を踏まえてこの地域はどのようであるべきか積極的でかつ具体的な政策的提案はなされていない。たしかにこれは困難なことであるに違いないが，やはり調査を踏まえた政策提案があってしかるべきではなかろうか。

第3に上述のこととともかかわることであるが問題だと思われるのは，地域住民運動や労働組合運動に関する叙述がほとんど見当らないことである。第1章の分析視角には「『政策』と『運動』を取り上げてゆく必要がある」（傍点引用者）と指摘されていたが，地域運動や労働組合運動についても独立に1章を設けて解明して欲しかった。そしてこのことはまた地域政策への積極的提案を検討する上でも一定の役割をもちえたであろう。

以上本調査の積極的意義を充分に評価するが故にこそ，評者はこの5年間にものぼる真摯な営為に対し，勝手な注文をつけさせて頂いたが，それはこの有能で且つ気鋭の集団に今後も大いに期待するからにほかならない。

少しでも調査に参加した経験のあるものならば直ちにわかることだが，調査対象地域もまたお互いの職場も居住地も離れた研究者達が5年間にもわたる共同の調査研究を維持することが，いかに困難であるか。評者は黒川教授をはじめとする調査の参加者の皆さんの情熱と努力に心から敬意を表するものである。そして同時にこのすぐれた研究集団の次の仕事に大いに期待をして筆をおきたい。

加　藤　佑　治

（専修大学経済学部教授）